中東地域研究の手法

1．研究組織

研究代表者：片倉もとこ（中央大学総合政策学部・教授）
研究分担者：上岡　弘二（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・教授）
鈴木　　董（東京大学東洋文化研究所・教授）
大塚　和夫（東京都立大学人文学部・助教授）
小杉　　泰（国際大学大学院国際関係学研究科・助教授）
清水　芳見（東京都立大学人文学部・助手）

2．研究のねらい・目的

重点領域研究「総合的地域研究の手法確立」のなかの計画研究班「総合的地域研究の概念」（研究代表者：高谷好一）の公募研究班として行なわれる本研究には、主として以下の学術的目的がある。

一つは、中東地域を専門とする研究者の立場から、北アフリカから西アジアまでの広い地理的領域にまたがり、長大な歴史的伝統と独自の文明とを誇るこの地域を、総体的に研究していく手法を探ることである。本研究は中東の主要な三つの民族集団（アラブ、イラン、トルコ）を研究対象とする研究者によって構成されているが、この目的を達成するためには、狭い調査地だけへ関心を限定するとか、自分の研究分野に閉じこもるとかいった傾向を排除し、さまざまな研究分野に従事する研究者の協力に基づいた学際的な討論の場を設けなくてはならないとの認識を、研究参加者全員がもっている。

二つ目には、このように中東地域を基礎に練り上げた地域研究の手法を、東アジア、東南アジア、南アジア、アフリカなど、中東以外の地域研究の専門家たちの議論から生まれてきた手法と比較・検討し、その異同を確認することによって、よりグローバルな視点に立つ地域研究の理論・方法論の確立を目指すことである。この成果は、中東地域研究の領域にフィードバックされ、より広い視野に立った中東研究のあり方を提起することになると考えられる。

さらに、より実際的な問題として、4度にわたる中東戦争、石油ショック、イラン革命、湾岸戦争、パレスチナ・イスラエルをめぐる中東和平交渉などの国際的な事件が起きるたびに叫ばれ、またそれらの事象が過ぎ去るとただちに忘れられがちになる、わが国における中東地域に関するさまざまな情報の蓄積とその普及のあり方を探ることも、本研究参加者が共通にもつ関心事である。

3．平成5年度の研究経過

本研究は3年間で終了する予定で計画されたが、平成5年度は、研究の初年度ということで、本研究の参加者どうしの議論を通して、「中東地域研究」に関する共通の理解・認識を固め、次年度以降の研究の方向づけを確立することを目指し、そのための研究会を3度にわたって開催した。第1回が5月9日に（中央大学駿河台記念館）、第2回が9月4日に（中央大学駿河台記念館）、第3回が11月13日から11月14日にかけて（新潟県南魚沼郡六日町）である。研究代表者と研究分担者は全員がいずれの研究会にも参加し、第3回研究会には、そのほかに、コメンテーターとしてお招きしたゲスト・スピーカーの参加や他の研究班からの参加もあった。平成5年度に開催した研究会では、研究代表者、研究分担者6人全員が研究発表を行なった。

また、本研究の参加者は、共同研究の成果に立脚しつつも、それぞれの関心に応じて「総合的地域研究の手法確立」プロジェクトで開催された他の研究会にも参加し、中東に限定されない、より一般的な視野のもとで、地域研究に関する知識を得た。同様に、地域研究に関する知識獲得のため、中東を中心とした地域研究関連文献の収集も行なった。

以下、各研究会の研究発表と討論について、その概要を報告する。

(1) 第1回研究会

この研究会では、本研究班の代表者である片倉もとこが基調報告を行ない、それをめぐって討論がなされた。また、各研究者が今後研究プロジェクトにどのように参加していくかを中心に、研究の進め方等についての打ち合わせも行なわれた。

まず、本研究班が属する計画研究班（「総合的地域研究の概念」班）の研究代表者である高谷好一教授が提出した「世界単位」の概念を、斬新な仮説としてまずは肯定的に評価しつつ議論を進めることを、全員が確認したのち、片倉より、「中東地域研究の方法」研究プロジェクトを進めていくにあたっての、三つの指針が示された。一つは、地域研究において時間と空間をどのようにとらえるかを明確化していくということ、二つ目は、中東を政治的な地域ではなく文化的な地域として見ていくということ、三つ目は、現在求められている「地域研究」とはどういうものかを考えながら研究していくということである。とくに、二番目については、中東の場合、人の移動が頻繁に行なわれていることから、地域の属地的な側面（面としての地域）にくわえて、地域の属人的な側面（点としての地域で、人の移動にともなって移りうる）も考えなくてはならないのではないかとの提案がなされた。そのあと、この片倉の基調報告をもとに、中東を単位に分けることの意味、イスラームの位置づけ、世界単位を考える際のメルクマール、中東以外の地域との比較、いわゆる外文明の問題等について、討論が行なわれた。

(2) 第2回研究会

この研究会では、研究分担者の清水芳見と大塚和夫が、それぞれ「生態学的に見たシャーム（シリア地方）――自然環境を中心に――」、「ナイル灌漑農業における水・土地・労働力」という題で発表した。両方とも、シャームおよびナイル河谷を世界単位とみなした場合の予備的報告である。

清水は、中東のなかの、歴史的に「シャーム」と総称される地域（現在のシリア、レバノン、ヨルダン、イスラエルにほぼ相当する地域）について、世界単位としての成立の可能性を探る手始めということで、シャームの生態学的な側面、とくに自然環境を取り上げて検討を加えた。その結果、シャーム全体として見れば、自然環境は多様であるが、自然の障壁によって他の地域と隔てられたところで、自然環境の異なる地帯が互いに連関し合っており、自然環境からみれば、シャームは一つの統一された世界を形成しているといえるのではないかとの仮説が提示された。この清水の発表に対して、参加者からシャームとその他の地域を分ける境界線や両地域の重なる部分、遊牧民など移動する人々の扱い等の問題点が指摘された。

大塚は、調査地であるスーダン北部の事例を中心にナイル河谷の灌漑農業を取り上げ、ナイル河谷で農耕を成り立たせている基本要素と考えられる、水、土地、労働力の三つに関して比較・検討を加えた。ナイル河谷の世界単位としての成立の可能性については保留したが、この3要素はナイル河谷を世界単位として考えるうえでの重要なメルクマールになるのではないかとの見解を示した。この大塚の発表に対して、参加者は、主として各自のフィールドでの調査の経験をもとに意見を述べた。たとえば、この三つの要素のうち、とくに水の確保の問題は中東の他の地域の農業を考えるうえでも重要なものであるとの認識で全員が一致したほか、イランの農業では、この3要素にくわえて、種子と畜力が重要であるとの意見も出された。

(3) 第3回研究会

この研究会では、研究分担者の鈴木董、上岡弘二、小杉泰の3人が、それぞれ「世界、世界帝国、世界単位」、「イランと“世界単位”」、「中東地域の形成をめぐって――イスラーム化とアラブ化の検討――」という題で発表した。また鈴木と上岡の発表に対して鈴木均アジア経済研究所研究員が、小杉の発表に対して立本（前田）成文京都大学東南アジア研究センター教授がコメントを行ない、さらに3人の発表全般について、石田進国際大学大学院国際関係学研究科教授がコメントを行なった。討論には、上記の6人、研究代表者の片倉もとこ、研究分担者の大塚和夫と清水芳見のほか、「総合的地域研究の概念」班の高谷好一京都大学東南アジア研究センター教授と「地域と生態環境」班の古川久雄京都大学東南アジア研究センター教

授が参加した。

鈴木董は、さまざまな「世界」概念を紹介したのち、価値体系や制度等を共有する「文化世界」という概念を提示し、この文化世界に相当するのがイスラーム世界であるとした。また、ある文化世界の価値を自他ともに体現すると見られ、その世界の多くをおおう帝国を「世界帝国」という概念で表現し、16世紀初頭以降のオスマン帝国がイスラーム世界という文化世界のなかの世界帝国といいうるとの見解を示した。さらに、こうして提示された「文化世界」、「世界帝国」の概念を、「世界単位」の概念と比較・検討した。この鈴木の発表に関して、コメンテーターの鈴木均は、専門のイラン地域との比較を行ないながら、主としてイスラーム世界のまとまりの問題を取り上げた。討論では、とくに「世界単位」の概念に関して問題点が指摘された。

上岡は、イランについて、世界単位としての成立の可能性を探る試みとして、主として生態環境と言語事情の側面から検討を加えた。イランでは、一般に考えられているイメージとは異なり、ペルシア語を話す人々は全人口の50パーセント程度であり、トルコ語系の言葉やアラビア語を話す人々も少なくないという状況が示された。鈴木均は、上岡の発表に関して、イランにおける地域圏とネットワーク、イラン的なものとイスラーム的なものといった問題を取り上げて論じた。討論では、言語事情とも関連して、イランにおける遊牧民など移動する人たちの問題などが取り上げられ、中東においては、言語地図の作成は不可能との指摘がなされた。

小杉の発表では、中東がいかに形成されたかという問題を、イスラーム化とアラブ化の視点から検討が加えられた。その際、高谷教授が世界単位の定義のところであげている「同一の世界観の共有」という点が、イスラームおよびイスラーム世界の規定の問題との関連で、議論の中心の一つとなった。この小杉の発表に対して、立本（前田）は、東南アジア研究の視点から、とくにイスラーム化の問題に言及し、世界単位が述語的論理であるのに対して、東南アジアにおけるイスラームは主語的論理であるとの見解を示した。そのあと、中東研究者、東南アジア研究者それぞれの視点から、理念（イスラーム）と現実（ムスリム社会の実態）の問題、地域を属地的にとらえるか属人的にとらえるかといった問題等について、討論が行なわれた。

鈴木、上岡、小杉の３人の発表全般についての総括として、石田進は、地域の動態的把握の問題、「世界」という言葉の概念の問題、ソ連崩壊後イスラーム世界の一部として注目をあびるようになった中央アジアの問題の三つを取り上げて論じた。そのあとの総合討論では、小杉の発表の際にも議論された属地的地域と属人的地域の問題のほか、イスラーム世界を世界単位との関連でどのようにとらえるか、世界単位を考える際に時間軸をどのように設定するか、と

いったことについて意見が交わされた。

4．研究の成果

本年度、本研究班では、高谷教授が提出した総合的地域研究の手法確立へ向けての「世界単位」の概念の検討に重点を置きながら議論を進めてきた。そのため、この概念を中東に適用することが可能かどうかがもっとも重要な検討課題となったが、東南アジア研究から提出された概念であるため、中東に単純に当てはめることは困難であろうというのが、当初から研究参加者全員の一致した見方であった。以下、本年度の研究会での議論から提起された問題点をあげる。問題点は、いずれもこの世界単位に関わるものである。

本研究班で問題となった点の一つは、世界単位を設定する際のメルクマールが一定していないということである。生態環境や歴史性を重要なメルクマールとみなしていることは認められるが、高谷教授の東南アジアに関する分類では、それらメルクマールに対する比重の置き方がかならずしも一様ではない。これは、一つには、世界単位を設定する際に、「直感」を重視する同教授の姿勢に起因するものであると考えられる。

たとえば、歴史性という問題ひとつをとってみても、どの時代を中心として考えるのか、過去か現在か未来か、あるいはそれらを統合して考えるのかという、時間軸の設定が明確ではない。かりに現在を中心にして考えるとしても、その現在と過去とのつながりを完全に無視することはできない。ことに中東では、古代オリエント文明、イスラーム文明など、古来多くの文明が生まれ、それらは世界各地に大きな影響を与えている。たとえば、イスラーム文明について見ると、現在世界のムスリム人口は10億人に達するといわれるが、中東の場合、全人口の90パーセント以上がムスリムである。したがって、現在を考えるときにも、イスラーム文明をはじめ、この地域に生まれた諸文明との関係で過去をどこまで遡るかというのは、重要な問題である。世界単位の定義に際して、高谷教授は彼のいう「外文明」あるいは「強大文明」のもつ意味を重視しているが、中東は、この地域自体近代西洋文明のような外文明の影響を受けてはいるものの、上記のように、外文明（中東から見ると、多くの場合「内文明」）のいわば輸出地帯だったところであり、こういった文明を生み出さなかった東南アジアとは、やはり外文明のもつ意味が大きく異なっていると考えられる。

もう一つは、「地域」というものをどのように設定するかという問題である。「平成５年度の研究経過」のところですでに述べたように、中東の場合、地域の属地的な側面だけでなく、地域の属人的な側面も無視できないのではないかとの意見が議論の過程で出された。アジア、

アフリカ、ヨーロッパの3大陸を結ぶ要衝であり、また、上述のように、多くの文明が誕生した地でもある中東においては、こういった地理的、歴史的な事情ゆえに、昔から人の移動が頻繁に行わなれてきた。したがって、こういった人の移動を考慮に入れることなしに、この地域を理解することはできない。ことに現代は、陸路や海路だけでなく、空路での移動も頻繁であるから、移動する空間は広大である。

本研究では、高谷教授が提出した世界単位を肯定的に評価していくということを前提として、研究を進めている。研究参加者のうち、清水、大塚、上岡の3人が、各自の研究発表において、同教授が世界単位設定のもっとも重要なメルクマールとみなしていると思われる生態環境を中心として、中東の諸地域に関する世界単位を考えるという試みを行なったのも、一つには、そういった前提があるからであった。だが、もし属人的地域というものが設定されたとすると、こういった地域は人のネットワークによって形成されるものであるから、生態環境はどうでもよいということになるのみならず、地域の属地的な側面だけに注目する世界単位それ自体も、設定する根拠が失われてしまうことになるのである。たとえば、議論の過程で、中東と関連してイスラーム世界のことが何度も話題にあげられたが、イスラーム世界というのはネットワークによって成り立つ、まさに属人的地域の典型例であるということができよう。

5．今後の課題

本研究班では、来年度以降も、学術的な視点に立って、地域の枠に不必要に拘束されないという本年度の方針を原則的に保ちながら、本年度の研究成果を踏まえて、研究会を中心に研究を進めていく予定である。

本研究参加者はいずれもアラブ、イラン、あるいはトルコを研究対象としており、また、学問分野としても文化人類学、歴史学、言語学などを専攻する者が多いので、必要に応じて、中東のその他の民族集団（ユダヤ＝イスラエル、クルド、ベルベルなど）の研究者や、他の学問分野、たとえば、国際関係論、考古学、文学などの研究に携わる専門家にも、研究会での研究発表を依頼する。さらに、本年度の研究会での東南アジア研究者の参加が本研究参加者にとって非常に刺激的であったことから、東南アジア、南アジア、中国、アフリカといった、中東以外の地域を研究対象とする研究者にもゲスト・スピーカーとして積極的に議論に参加してもらい、多角的な視野から研究を進めたいと考えている。また、世界単位の概念が東南アジア研究から提出されていることに鑑み、中東研究者として、東南アジア地域の状況を知るために、文部省の科学研究費補助金その他の基金により、同地域での短期の合同学術調査を行なうことも

検討中である。

本年度の研究会では、中東への適用ということを中心に、「世界単位」の概念の検討に重点を置きながら議論を進めてきた。そのため、議論の過程で出された問題点の多くは、この世界単位に関わるものであった。したがって、本年度以降も引き続き世界単位が議論の中心になっていくものと思われるが、その際、「研究の成果」のところにあげた、世界単位設定の際のメルクマールの問題と地域の設定の仕方の問題が主要な検討課題となろう。ことに属地的地域と属人的地域をどのように考えるかは、世界単位の設定に関係することであり、そういった意味でも、中東以外のさまざまな地域の研究者を交えて討論を行なうことが有益であると思われる。

6．研究業績（平成5年度発表分）

片倉もとこ

Japan and the Middle East, Tokyo : The Middle East Institute of Japan, 1993.

「動の思想」『民博通信』61 : 7-16, 1993.

「中東」矢野暢編『講座現代の地域研究第2巻 世界単位論』弘文堂（印刷中）

上岡弘二

「私は、何者か――イラン人の帰属意識と国家意識――」飯島茂編『せめぎあう「民族」と国家』アカデミア出版会, pp. 37-59, 1993.

鈴木 董

『イスラムの家からバベルの塔へ――オスマン帝国における諸民族の統合と共存――』リブロポート, 1993.

『オスマン帝国の権力とエリート』東京大学出版会, 1993.

『イスタンブル歴史散歩』河出書房新社, 1993.

『イスラームの世界史（全3巻）』（佐藤次高、坂本勉と共編著）講談社, 1993.

大塚和夫

『イスラームを学ぶ人のために』（山内昌之と共編著）世界思想社, 1993.

「北スーダン・アラブ人の空間認識――農地、村落、屋敷地――」杉本尚次・中村泰三編『変動する現代世界のなりたち』晃洋書房, pp. 101-116, 1993.

「ボーダーレス時代のボーダー――人の国際的移動とエスニシティー――」高田公理・石森秀三編『「新しい旅」のはじまり』ＰＨＰ研究所, pp. 47-82, 1993.

小杉 泰

『現代中東とイスラーム政治』昭和堂, 1994.

Al-Saltanahofi al-Fikr al-Siyasi al-Islami (coauthored with Yusuf Ibish), Beirut : Dar al-Hamra, 1994.

"The Future of Islamic Revivalist Movements and Democracy." *Japan Review of International Affairs*, 7(2) : 114-127, 1993.

「ウマラーと法学派」山内昌之・大塚和夫編『イスラームを学ぶ人のために』世界思想社, pp. 36-50, 1993.

「アフガニスタンの炎：イスラーム闘争の広がり」石田進編『中央アジア・旧ソ連イスラーム諸国の読み方』ダイアモンド社, pp. 75-82, 1994.

"Religion, Community and Political Culture : Reflections on Millah." 『国際大学中東研究所紀要』7, 1994（予定）.

清水芳見

「イスラーム講座4 イスラームの儀礼」『イスラム世界』42：101-118, 1993.

「アラブ・ムスリムの動物観——ヨルダン北部一村落の事例を中心に——」『人文学報』（東京都立大学人文学部）251：113-170, 1994.